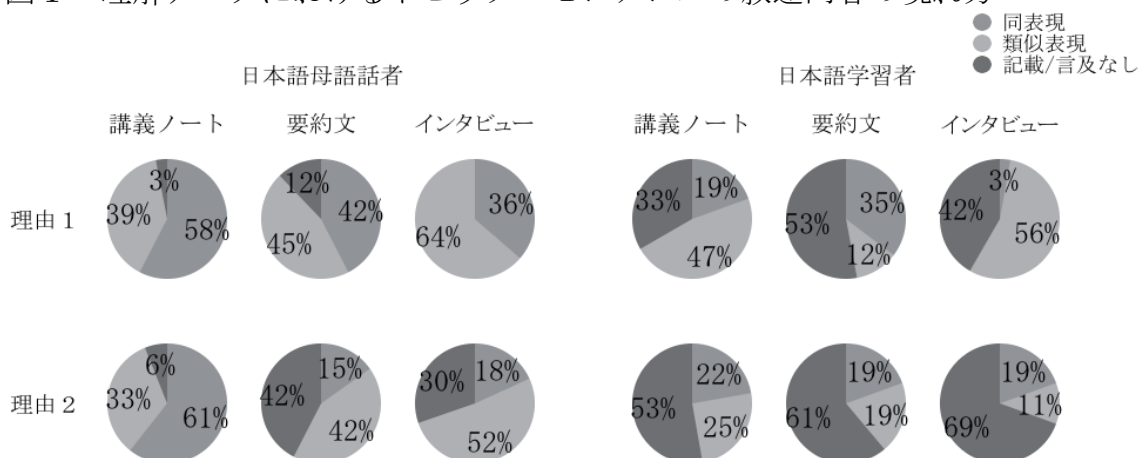


「論理」「押しつけ」、理由の二つ目については「言い直す」「言葉」「ない」などトピック・センテンスの叙述内容を構成する表現がそのまま使われている「同表現」、表現は異なっても類似の意味を表す表現、あるいは、同一話段中でトピック・センテンスの叙述内容を言い換えている表現が使われている場合は「類似表現」、そして、「ていうか」が不愉快な理由としてこれらのトピック・センテンスの内容が現れていない場合、または、そもそも「ていうか」が不愉快な理由を記載／言及していない場合は「記載／言及なし」として分類した。調査結果は図1のとおりである。

図1 理解データにおけるトピック・センテンスの叙述内容の現れ方



もし、メタ言語表現が先行する方が後続する場合よりも講義理解に良い影響があるのであれば、上のグラフよりも下のグラフの方が「同表現」の数値が大きくなるはずである。しかし、そのような予測した傾向は現れなかったと言わざるをえない。

「同表現」が一つ目の理由よりも二つ目の理由の方で増えているのは、日本語母語話者と日本語学習者の講義ノート、そして、日本語学習者のインタビューである。講義ノートに関しては、日本語母語話者も日本語学習者も増加した割合はわずかなので、メタ言語表現の位置の違いが有意に現れているとは判断できない。日本語学習者のインタビューは3%から19%へとかなりの増加を示しているが、それでも「記載なし」が42%から69%へと増えていることを考えると、予測した傾向が現れているとは言えない。

予測した傾向が現れない要因として、それぞれの話段の長さの違いが挙げられる。一つ目の理由の方は90文なのに対して二つ目の理由の方は23文と、前者の方が長い。話段が長いと、トピック・センテンス以外でもその叙述内容のキーワードが繰り返されたり言い換えられたりするので、トピック・センテンスにおけるメタ言語表現の位置の要因が弱くなったと考えられる。渡辺(2015)による短い講義素材を用いたタスク調査でも、キーワードの繰り返しによって、メタ言語表現が現れる位置的な影響が現れなくなるという結果があったが、本研究でも同様であったと言える。

もう一つの要因は、叙述内容が短い表現でまとめやすいかどうかという点である。一つ目の理由の方は、「論理の押しつけ」と名詞句としてまとめやすいのだが、二つ目の理由の「言い直す言葉がないときにも用いられる」という内容は「論理の押しつけ」のように簡単な名詞句として言い換えることが容易ではない。日本語母語話者の場合、二つ目の理由を61%の被調査者が講義ノートに「同表現」で書き取っていたのに対し、要約文やインタビューで「同表現」で言及したのはそれぞれ15%、18%に過ぎず、「記載／言及なし」が増えているのは、この要因が関わっていると見られる。日本語学習者の場合、二つ目の理由に関して約半数が講義ノートへの記載がなかったが、それは叙述内容の表現の長さが影響していると考えられる。一つ目の理由が「記載／言及なし」の日本語学習者が33%であったことと比べてみると明らかである。

次に、「ていうか」が不愉快な理由に関して、それらを講義ノートに書き取っていない被調査者が、要約文やインタビューで不愉快な理由に言及しているかどうかについて調べてみた。ノートに書き取るという行為は、聞いた内容が重要である、あるいは、ノートに記録しておくべき内容であるとの判断によって起こると考えると、講義ノートと要約文やインタビューとの関連を調べることは意味があると思われる。

表1 講義ノートに理由の記載のない被調査者の要約文・インタビューの状況

	要約文		インタビュー		
	「不愉快」指摘なし	理由言及なし	「不愉快」指摘なし	理由言及なし	
理由1	JPN (n=1)	1 (100%)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
	NNS (n=12)	7 (58.3%)	8 (66.7%)	5 (41.7%)	9 (75.0%)
理由2	JPN (n=11)	0 (0%)	7 (63.6%)	0 (0%)	5 (45.5%)
	NNS (n=19)	8 (42.1%)	16 (84.2%)	6 (31.6%)	17 (89.5%)

表1は、理由を講義ノートに記していない被調査者のうち、要約文やインタビューで「ていうか」が不愉快な印象を与える表現であるということ指摘していない人数・割合、そして、それぞれの理由について言及していない人数・割合をまとめたものである。対象となる被調査者は、一つ目の理由については日本語母語話者は1名、日本語学習者は12名、二つ目の理由については日本語母語話者は11名、日本語学習者は19名であった。一つ目の理由に関する日本語母語話者の対象者は1名しかいないので、考察の対象から外すことにする。

表1の数値から、日本語母語話者よりも日本語学習者の方が、要約文・インタビューにおいて理由についての言及が少なくなる傾向が見出せる。また、日本語学習者について、一つ目の理由よりも二つ目の理由の方が要約文・インタビューでの言及が少なくなる傾向も見られるが、それは前述した叙述内容の長さやまとめやすさに関する要因が関わっているとと言える。

表2 講義ノートに理由の記載のある被調査者の要約文・インタビューの状況

		要約文		インタビュー	
		「不愉快」指摘なし	理由言及なし	「不愉快」指摘なし	理由言及なし
理由1	JPN (n=32)	3 (9.4%)	3 (9.4%)	0 (0%)	0 (0%)
	NNS (n=24)	5 (20.8%)	6 (25.0%)	3 (12.5%)	6 (25.0%)
理由2	JPN (n=22)	4 (18.2%)	7 (31.8%)	0 (0%)	5 (22.7%)
	NNS (n=17)	4 (23.5%)	6 (35.3%)	2 (11.8%)	8 (47.1%)

比較のために、不愉快な理由について講義ノートに記載のある被調査者に関する数値を表2として示す。表1と表2を比べると、講義ノートに書かれていないということは、講義後の理解表象に影響を与える、つまり、講義ノートに書かれていないことは理解された内容から抜け落ちる傾向があり、その傾向は学習者において顕著であるということを示している。たとえば、日本語母語話者の場合、講義ノートに記載のある被調査者で要約文・インタビューに理由の言及がない割合は0%~31.8%であるのに対し、講義ノートに記載のない被調査者では45.5%~63.6%になっている。日本語学習者の場合では、記載のある被調査者では25.0%~47.1%であるのに対し、記載のない被調査者では66.7%~89.5%であった。

6. おわりに

以上、講義の談話の聴解において、トピック・センテンスの理解とメタ言語表現の使われ方との関連について考察した。調査の結果、メタ言語表現がトピック・センテンスの叙述内容に先行した方が理解しやすいのではないかという予測を支持する結果は得られなかった。トピック・センテンス内におけるメタ言語表現の位置的効果については、関わる要因が複雑で、単純にトピック・センテンスの語順だけが結果に反映するのではないのであろう。また、日本語母語話者・学習者ともに、講義ノートにおける理由の記載の有無が、要約文・インタビューでの言及の有無に影響を与えていた。メタ言語表現に注意を払ったノートの取り方が、後の理解表象に影響を与えるということがわかった。

この研究は、平成27年度~29年度科学研究費基盤研究(C)「学部留学生の講義聴解力を伸ばすための談話表現の研究」(課題番号:15K02629 研究代表者:渡辺文生)および、平成28年度~30年度科学研究費基盤研究(C)「講義理解における要約力に関する研究」(課題番号:16K02825 研究代表者:佐久間まゆみ)の成果の一部である。

参考文献

- 西條美紀(1999)『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
 佐久間まゆみ(編著)(2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版

- 佐久間まゆみ（研究代表者）（2015）『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究』2014年度特定課題研究助成費（A）（2014A-059）研究成果報告書
- 中井陽子・寅丸真澄（2010）「講義の談話のメタ言語表現」佐久間まゆみ（編著）『講義の談話の表現と理解』153-168 くろしお出版
- 李婷（2014）「講義の談話におけるメタ言語表現の働き」石黒圭（編）『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』44-59
- 渡辺文生（2014）「講義のテーマに基づく受講者インタビュー談話の分析」石黒圭（編）『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』134-144
- 渡辺文生（2015）「講義の談話におけるトピック・センテンスの聴解について」『2015 CAJLE Annual Conference Proceedings』358-367 カナダ日本語教育振興会